

第68回中日理論言語学研究会 20260927 同志社大学大阪サテライト・キャンパス

日本語の「長い文」発話に見る態度性

定延利之（京都大学）

言いたいこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。

言いたいこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。

日本語母語話者の話す文は時に長い 1/2

- “At the level of the sentence, the writers in this sample structured their stories into multi-clause sentences with much greater consistency than did the speakers. The median number of main clauses 7 per sentences in the written narratives was 2.5, with a range of variation from an average of 1.5 to 3.9 across writers. In contrast, speakers had a median number of 8.3 main clauses per sentences, with an average range of from 1.8 to 34 clauses per sentences in individual stories. Only half of the speakers produced sentences which were similar to those of the writers, that is, fewer than four main clauses in length.” (p. 70)

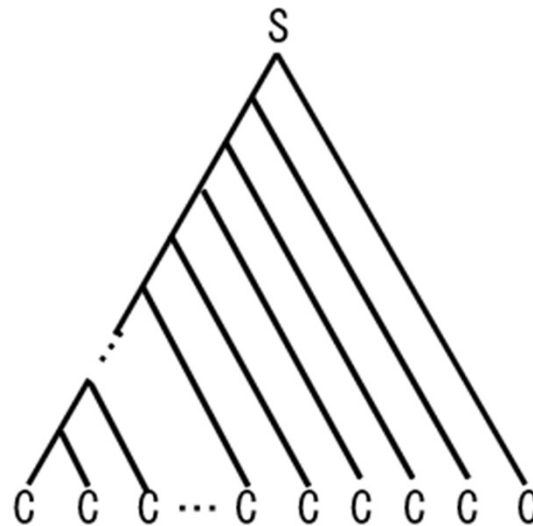
[Clancy, Patricia M. 1982. “Written and spoken style in Japanese narratives.” In Deborah Tannen (ed.), *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*, pp. 55-76, Norwood, New Jersey: Ablex]

日本語母語話者の話す文は時に長い 2/2

- “In this sample of Japanese narratives, four of the 20 speakers did not make any attempt to create a sentential level of structure distinct from that of the narrative as a whole; for example, **one speaker told her entire 34-clause story in a single long sentence**. These four speakers all told very brief stories; their equation of the sentence and narrative levels seems to be based on the intention of producing a summary rather than a full story.” (p. 71)

[Clancy, Patricia M. 1982. “Written and spoken style in Japanese narratives.” In Deborah Tannen (ed.), *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*, pp. 55-76, Norwood, New Jersey: Ablex]

極端な左枝分かれ構造の文？



[Auer, Peter. 1992. “The neverending sentence: Rightward expansion in spoken language.” In Miklós Kontra (ed.), *Studies in Spoken languages: English, German, Finno-Ugric*, 41-59, Budapest: Hungarian Academy of Sciences, Linguistics Inst.]

① 「構造」が整っている「長い文発話」



なんでね、こう、あの一、普通の、普通のね、普通の女性がですよ、ん、ふだん歩いている姿が、お、男の視線をね、こう、ん、浴びるようなあ、ことを助長するようなあ、ものが売れるのかって、わけわからんのですけどね。

Kobe Data No. 040, 55:26-55:46

「構造」が整っているとは？： 非流暢性を除けば首尾一貫



なんで

普通
ふ

の女性が
だん歩いている姿が、
男の視線を
びるような ことを助
長するような ものが
売れるのかって、わけわ
からんのですけどね。

「わたしのちょっと面白い話」 コンテスト (2010～)



「わたしのちょっと面白い話」コーパス（全777話）

<https://www.speech-data.jp/chotto/>

コンテスト（年度）	母語話者の作品	学習者の作品	字幕
第1回（2010）	17	—	日・英・仏・中
第2回（2011）	72	—	日
第3回（2012）	43	—	日
第4回（2013）	44	—	日・露
第5回（2014）	11	51	日
第6回（2015）	23	51	日
第7回（2016）	11	42	日
第8回（2017）	12	63	日
第9回（2018）	16	20	日
第10回（2019）	15	45	日
第11回（2020）	10	21	日
第12回（2021）	10	42	日
第13回（2022）	8	20	日
第14回（2023）	33	29	日
第15回（2024）	26	26	日
第16回（2025）	5	31	日
計	356	421	

② 「構造」が整っていない「長い文発話」

ID	節の数	文節の数	発話長 (s)	話の長さ (s)
#49	114	303	188	188
#28	39	179	109	251
#41	32	91	103	161
#30	36	133	100	131
#62	45	129	82	320
#27	22	102	72	110
#64	31	85	65	89

② 「構造」が整っていない「長い文発話」例 1 (#49)



#49の書き起こし

えー、さ、次ー、は、えーっと、えーっと、あたしーの、あの一娘ーの、あのエピソードで、最近で、一番おもしろかったことーなんですけど、あの一、今中学生、なんですけどー、あの、いつもどおり、時間割ーしたはってー、で、「あしたーの時間割ー、やらなー」って言ってやってー、そしたらなんか「基礎英語」の教科書、ないわー」とか言うからー、うーん、そ、そこらへん探してみーって言ったけど、「ない、ないー」って言うしー、いや、「えーなんで無いのー？」って言ったらー、あの一、「いや、あー、どうやった、えー、えー」って言うからー、まー、ちょっとわたしも、気にーしつつ、ほっといたんですけどー、あの一、ま、娘の学校で「基礎英語」ーの、あの一、教科書なんか使って、あの一、自分で購入して、持っていかなあかんーくって、で、そういう授業があるーんでー、なんか、買ったんは知った、知ってたんーですけどー、であの一、そしたら娘が、「そう言うたらA組ーかB組のだれかに貸したわー」って言うから、誰かって言うから、「だ、だ誰かって、だれー？」って言うたら、「わからんー」って言うから、「えっ、わからんのー？」って言って、で、「名前とかー書いてあるし、持ってきたん、持ってきてくれはるやろー」って言ったら、「名前書いてへーん」、てへへ（笑）、言うから、「あーそうなん、名前書いてへんねやん」って言って、「友だちーなん？」って言ったら、「うううーん」って言うし、へっ、「じゃ、部活の子なーん？」って言ったら、「うううん。違う」って言うし、「えっ、え、じゃー誰」ったら、「えー わからん、わからん」って言うし、「なんか憶えてるでしょう」って言って、「ちょっとぐらいなんか憶えてるでしょう」ったら、「うーん、女よ」って（笑）、「も、ほ、女しかわからへんの？」って言うたら、「ほんまに女しかわからへん」って言うんからー、で、もー、しゃーないなーと思いながら、まー、次の日、学校いかはってー、んでー、どーしはったんかなーっと思って、あした授業で使うって言ってたからー、いやー、どうすんのかーと思てー、で、帰ってきたとき、もうすぐ、「本どうしたーん。あったーん？」って言ったら、「あったわー」って言うし、「どこに、どうし、どう、どうなったーんって、なん、どこにあったん、だれに貸してたーん？」とかって言ったらー、「いやもー、わからへんしなー」って、うちの子はC組なんでー、A組行ってー、まずー一番最初A組行ってー、し教壇のところに立ってー（笑）、「すいませーん、だれか（笑）、わたしに「基礎英語」の教科書借りた人いませんかー」っておっきい声で言ったみたいでー、そしたら、あの一A組の子ーでー、「あっ、あたし借りたー」って言って、きてくらはってー、ほんでー、「ありがとう」って言ってー、「助かったー」って言って、言ってくら、言言って、ほんで家帰ってきてー、ふんで、「よかったなー、あってよかったなー」って言ったらー、ほんなら、その一子がー、なんかそのうちの子の名前知ってたみたいでー、「なんでー、あのうちのことー、@ありがとうー」って言わはんねーん？」って言って、で、うち、わたしが、「その知ってる子やって。そのクラスあの一顔は知らんけど、ちょっとぐらい知ってるやろー」言うても、「ぜーんぜん記憶に無いし、ぜーんぜん知らんねーん」て、言わはったんでー（笑）、うん。なんか最初すごいおこっ、もーわたしもー、話、きのう、「教科書ー、誰に貸したかわかれへん」っていうときは、すごい怒ってたんやけどー、なんか、途中から、なんかー、あまりのおとぼけぶりが（笑）、なんかおもしろくなってきたー、ん、なんかー最近の中で、一番おもしろい話でした。



「構造」が整っていないとは？：

01-02行の節と03-04行の節が統語的に結びついていない

01	なんか	途中から	なんかー	あまりの
02	おとぼけぶりが（笑）		なんか	おもしろくなってきたー
03	ん	なんか	最近の中で	一番 おもしろい
04	話でした（笑）。			

[https://www.speech-data.jp/chotto/2011_sub/2011049.html, 3:00-3:09]

- ・ 「？ Xがおもしろくなってきた、（Yが）おもしろい話でした。」
- ・ 話し手は両節を最初から計画していたのではなく、意味的なつながりに支えられて、部分ごとに小刻みに発話している。

② 「構造」が整っていない「長い文発話」例 2 (#62)



#62の「長い文発話」の書き起こし



で、自分はこう、あーというような感じでその、ま、やっぱ、先輩に、いま、ひさ、も、何年かぶりにおうたからこう、あ、久しぶり、やっぱこう久しぶりにおうたらにこっとするのと半分、聞いている話と違うやんかって、浮気してるんかいなみたいな感じで、向こうも、いやー思うたみたいでー、あとで、で、やっぱ中学校の一、クラブの時の運動部の先輩やから、上下関係いうんか、言われへんけど、やっぱ厳しいいうんか、しとんでー、で、「ちょっとー」いうて呼ばれたから、「だまっといてくれるか」、「だまるもなにもそんなん言えません」って、で、それから急に先輩が優しくなあってー、「今度、いつ休みやー？」いうて、「食事でも行こう」「いやいや、そんな、言えませんかー」、口止め料ー、っていう、感じでー、すごい、なんか、世間って狭いというかー、しゃれにならんというかー、で、男って、バカというか、なんか、やっぱり、悪いことしたらこうー、なんか、だまされ、あの、芝居ができひんか、も、露骨に顔に表情、でなんか、だから、自分、ほんま先輩に何年かぶりみて、「あ、ひさ、久しぶりですー」いう、気持ちが強かったからー、け、けど向こうはー、もうすでにそのー、こっちのダーティーな部分を知ってるから余計、きまずい？



「構造」が整っていないとは？：

01行の「その人」が置き去りになり、節を構成できていない

01 で **その** **その人** で こっちは
02 男 2人で 行っってえ で 向こうは
03 その人 紹介の 人と
04 あと 2人 来たんですけど

[https://www.speech-data.jp/chotto/2011_sub/2011062.html, 0:27-0:35]

- 話し手は節を最初から計画していたのではなく、意味的なつながりに支えられて、部分ごとに小刻みに発話している。

日本語の「長い文発話」の実際：
発話計画は発話時点では未決定。文は最終部だけ。

で (W) 自分は (P) こう (W) …… ん (W) なんか (W)
最近の中で 一番 おもしろい 話でした (笑) (S)。

w, **p**, **w**, ..., **c**, **w**, **w**, **s**.

(S: sentence, C: clause, P: phrase, W: word)

言いたいこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。

「談話は文からできている？」

肯定説（唯文主義）

例：

“Discourse is made up of sentences, and through linguistic analysis we have learned a good deal about them.”

[Smith, Carlota S. 2003. *Modes of Discourse: The Local Structure of Texts*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.]

「談話は文からできている？」

否定説「文は自然会話の単位ではない」

- **“Many linguists working on spoken language abandon the sentence as an analytic unit as a result of data like text in (1), which is the transcription of a conversation.” (p. 116)**
- **“There is very little evidence to support either text-sentences or system-sentences in spontaneous spoken language.” (p. 132)**

[Miller, Jim. 1995. “Does spoken language have sentences?” In F.R. Palmer (ed.), *Grammar and Meaning: Essays in Honour of Sir John Lyons*, 116-135, Cambridge University Press.]

- **“The sentence being inapplicable in the analysis of spontaneous spoken language is part of a larger phenomenon, the general unintegrated nature of the syntax of spontaneous speech.” (p. 71)**

[Miller, Jim, and Regina Weinert. 1998. *Spontaneous Spoken Language: Syntax and Discourse*. Oxford: Clarendon Press.]

「談話は文からできている？」

否定説 「家庭内会話は文単位ではなく節単位」

- “It is arguable that all of the above problems (定延注: (a) indeterminate connectivity; (b) indeterminate ellipsis; (c) intercalation of structures) arise solely because of the attempt to impose a descriptive model on the data which uses *sentence* as a primitive term. **This variety of English, however, does not seem to be readily analysable in terms of sentences. Rather, the *clause* is the unit in terms of which the material is most conveniently organized** (as illustrated in the examples above).” (p. 159)

[Crystal, David. 1980. “Neglected grammatical factors in conversational English.” In Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartak (eds.), *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*, London; New York: Longman, pp. 153-166.]

「長い文発話」でなくとも同じ 01-02行の「こっちは」が置き去り



01	でー (W)	こっちは (P)	向こうは	向こうで
02	話題が	盛り上がってて (C)、		こっちは (P)
03	で (W)	その 先輩が		3人兄妹でえ (C)

[https://www.speech-data.jp/chotto/2011_sub/2011062.html, 1:31-1:38]

- 話し手は節を最初から計画しているのではなく、意味的なつながりに支えられて、部分ごとに小刻みに発話している。

ちなみに 「感動詞などは文か？」 肯定説

ここでは、文を次のように捉えている。私たちは、現実との関わりの中で、言語を利用することによって、考えや感じを明確にしたり、また、考えたことや感じたことや意志や要求を相手に伝えたりしている。このような活動を〈言語活動〉と呼んでおく。私たちが見聞きする文章や談話は、言語活動の所産である。文章・談話は、文一つで出来ている場合がないわけではないが、通例、いくつかの文の連なりによって出来上がっている。〈文〉は、このような文章や談話の中に具体的に観察される基本的単位であり、したがって、**文によって、言語活動が行われている**、と言えよう。**文は言語活動の基本的単位である**、というのが、筆者の文に対する基本的で根底にある捉え方である。(p. 15)

[仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』 東京：くろしお出版]

「感動詞などは文か？」 肯定説

“Not the least important conclusion which will emerge from our discussion is that the ‘word’ is the unit of language, whereas **the ‘sentence’ is the unit of speech.**”

[pp. 62-63]

[Gardiner, Alan H. 1951. *The Theory of Speech and Language*. 2nd Edition (1963), Oxford: Clarendon Press.]

「感動詞などは文か？」否定説 だが具体的根拠はない

つまるところ、「ねずみ！」は、発話場面の中で話し手によって発話された上述の意味における談話であり、発話時の言語文脈と発話場面情報によって、上記の意味が表現され解釈されているという事実注目すれば、これを一語からなる談話、すなわち「一語談話」と記述することが妥当であろう。「ねずみ！」は、「一語文」ではなく、「一語談話」である、と考える。

以上、「ねずみ！」のほかにも「わあ！」などは、一語談話ではあるが一語文ではないことになる。文とは抽象的に取り出すことができるレベルにおける単位であって、単肢言語である現代日本共通語においては、述語を有した記号的まとまりを指して「文」と定義する考えにくみする。この定義にしたがえば、「痛い！」は、一語談話であり、かつ、「痛い！」という発話から「文」を抽象できることになる。この場合は述語のみの文であって、格は省略された一文である。ちなみに、先の「ねずみ！」「わあ！」という一語談話から抽象的に抽出されるのは、「ねずみ」「わあ」という「語」である。

(pp. 74-75)

[沖裕子 2006 『日本語談話論』 大阪：和泉書院]

「感動詞などは文か？」 否定説を採る根拠： 「よお」の出現位置と発話キャラ

・ あした	+	よお	=	あしたよお	(下品な男)
・ そこで	+	よお	=	そこでよお	(下品な男)
┌ └	・ 見て	+	よお	=	見てよお (下品な男)
	・ 見て	+	よお	=	見てよお (子供)
	・ 見た	+	よお	=	見たよお (子供)

- ・ 文末に現れれば下品な男の発話。
- ・ 文末でない位置に現れれば子供の発話。 「あの」は文か？

言いたいこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。

ヘッジ

- ~みたいなことも考えられるかもしれないと思いますね。
- ~なんてね。
- ~と言ってみるテスト。

.....

コンテストという 人工的な環境の発話データを用いる理由

文の持続・終了の要因

[1] 文に関わる要因

[2] 発話全般に関わる要因

文について考えたいので、[2]を排除して[1]に集中したい。

発話全般に関わる要因とは？

例(a) 発言権をめぐる争い

(b) 聞き手からの視線がなければ発話を続けられない。

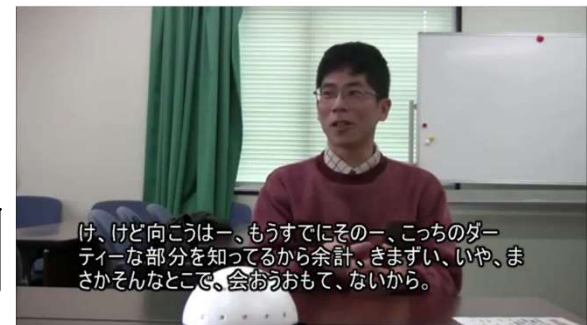
“I gave, I gave up smoking cigarettes:: l-uh one-one week ago t‘da:y. acshilly” (pp. 211-212.)

[Goodwin, Charles. 1995. “Sentence construction within interaction.” In Uta M. Quasthoff (ed.), *Aspects of Oral Communication*, pp. 198-219, Berlin; New York: Walter de Gruyter.]

コンテストのエントリー作品はこれらとは無縁。

((a) については2点で無縁。コンテストである上に体験談（後述）)

発話の要因は排除しきれない 聞き手が質問して発話にとぎれた例



#2011062 04:15.05-04:17.35

それ どうなったんですか。

sore do:na-tta-n=desu-ka

that how become-PST-NMLZ=COP.POL-Q

“What happened? Dis he get caught?”

ばれたんですか。

bare-ta-n=desu-ka

be exposed-PST-NMLZ=COP.POL-Q

#2011062 04:17.97-04:20.61

いや だまってたんで

iya dama-tte-ta-n-de

no keep silent-CVB-PST-NMLZ-CAUSE

“No, I didn’t say anything, so I don’t think they found out.”

ばれてはないと

bare-te-wa-nai-to

be exposed-CVB-TOP-NEG-QUOT

思います。

omoi-masu

think-POL

日本語母語話者の語る「面白い話」は体験談

- 大島希巳江 2011 「日本人がおもしろいと感じる話の傾向—日本—おもしろい話プロジェクト（2010年4月～2011年3月）の結果と分析」『笑い学研究』 18, pp. 14-24.
- 定延利之 2018a 「限界芸術「面白い話」と音声言語・オラリティ」定延利之（編）『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』 pp. 1-33, 東京：ひつじ書房
- Sadanobu, Toshiyuki. 2018b. “The “My Funny Talk” corpus and speaking style variation in Japanese.” In David G. Hebert (ed.), *International Perspectives on Translation, Education and Innovation in Japanese and Korean Societies*, pp. 133-147, Cham: Springer International Publishing.
- 山口治彦 2018 「パブリックな笑い、プライベートな笑い—ジョークと体験談に見る笑いの種類と文化の関係」定延利之（編）『限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究』 pp. 36-76, 東京：ひつじ書房

「体験談の前置きは発言権保持の宣言」 1/2

“Now the ‘story preface’ phenomenon which I talked of last time - things like “Say did you see anything in the paper last night” or “I heard something wonderful today” - announces that there is a story coming and therefore that what one intends is to be talking in alternate positions until the story is finished, not particularly caring who comes into the alternate positions, but whenever that finish their “Mm hm”s, “Uh huh”s, whatever else they put in, that others will be silent and allow you to go on. **So that basically what a story is in some ways, is an attempt to control the floor over an extended series of utterances.** Formally it can be said to be in the first instance an attempt to control a third slot in talk, from a first. That’s why, in terms of the sequential organization of conversation, that one is ‘telling a story’ is an important thing for others to recognize. So that, for example, if there were more than two persons present in this conversation, if she finished “Say did you see anything in the paper last night or hear anything on the local radio, Ruth Henderson and I drove down to Ventura yesterday,” and B said “Mm hm,” somebody else shouldn’t just go on about whatever they wanted to talk about. And people

「体験談の前置きは発言権保持の宣言」 2/2

“And people don’t. Stories can be told invariantly to the number of persons present in a conversation. That is, you have people telling stories in a seven-person conversation, and getting the floor for ten utterances across twenty.

So that’s one basic reason that, that you’re telling a story is something you do right off. And it makes, then, the issue of recognition of a story something that’s not only relevant to what happens after the story is finished, but to how the talk proceeds during the story. **And one major import of the story preface is announcing a ‘story’ and thereby announcing that this person is going to talk across a series of utterances, allow for others to talk in the course of his talk, and want the floor back after each finish of another.** The preface is, then, very important for the issue of ‘a story.’ Further, I suggested last time that a story preface does a lot of work. It indicates what it will take for the thing to be finished, and it suggests what sort of thing should be done at the end. And that’s one order of the things involved in ‘telling a story.’” (pp. 941-942)

[Sacks, Harvey. 1992. *Lectures on Conversation*, Volume II, edited by Gail Jefferson, with an introduction by Emanuel A. Schegloff, Cambridge: Blackwell]

体験談と語るに足ること

“The notion of reportability is well known to be relative to the immediate social situation, age, and other cultural parameters. A reportable event is defined here not in absolute terms but in relation to the narrative situation. [omission] The narrative speaker therefore holds the floor and occupies social space for a longer time than a conversational participant who is not telling a narrative. As Sacks (1992: II, 3-5) points out, other participants may take turns during the narrative, but the performance of the narrative effectively is a claim to return the assignment of speakership to the narrator until the narrator is completed.

(3) **Definition: A reportable event is one that justifies automatic reassignment of speaker role to the narrator.**

Implication: To be an acceptable social act, a narrative of personal experience must contain at least one reportable event.” (p. 66)

[Labov, William. 2001. “Uncovering the event structure of narrative.” *Georgetown University Round Table 2001*, 63-83.]

- 「長い文発話」はどこでなぜ終わるか？
- 「長い文発話」はそれまでなぜ終わらなかったのか？

「体験の語りには構造がある」 (Labov流)

- 
- 要約 (Abstract): Statement of the main point of the story.
 - 状況設定 (Orientation): Introduction of the characters, setting, time, and situation of the event.
 - 経緯の詳述 (Complicating Action): Description of what happened in chronological order. ←ここでは、山場に関係しない部分では「文発話」は終わりにくい。
 - 感想 (Evaluation): Positioning of the event from an objective perspective.
 - 結末 (Resolution): Description of the end of the event.
 - 終了 (Coda): Wrapping up the whole story.

[Labov, William, and Joshua Waletzky. 1967. "Narrative analysis: Oral versions of personal experience." In June Helm (ed.), *Essays on the Verbal and Visual Art*, pp. 12-44, Seattle: American Ethnological Society.]

[Labov, William. 1972. *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*, pp. 354-405 (The transformation of experience in narrative syntax), Philadelphia: University of Philadelphia Press.]

「長い文発話」の終わり方 1 : 山場を語る直前に聞き手の理解を確かめる

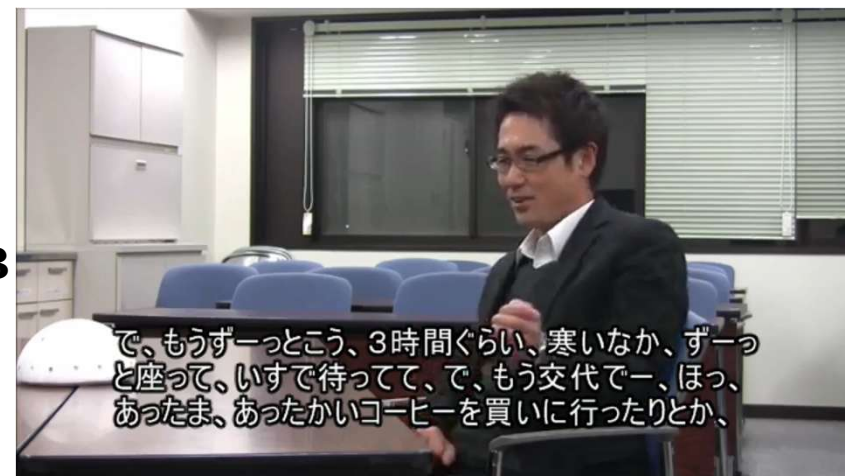
#2011028 02:07.72-02:12.16

...で	やっと	3 時間	たって
<i>de</i>	<i>yatto</i>	<i>san-jikan</i>	<i>ta-tte</i>
then	finally	three-hour	pass-CVB

“..., then three hours passed finally, and

まー	イベントが	始まったんですね。
<i>ma:</i>	<i>ibento=ga</i>	<i>hajima-tta-n-desu-ne</i>
<i>fiLL</i>	<i>event=NOM</i>	<i>start-PST-NMLZ-COP.POL-SFP</i>

“well, the event started, OK?”



「長い文発話」の終わり方2： 山場を語った直後に聞き手の反応を伺う

#2011027 00:59.99-01:12.03

... あのー おしっこを バジャー

ano: *oshikko=o* *baja:*

fiLL pee =ACC IDEO

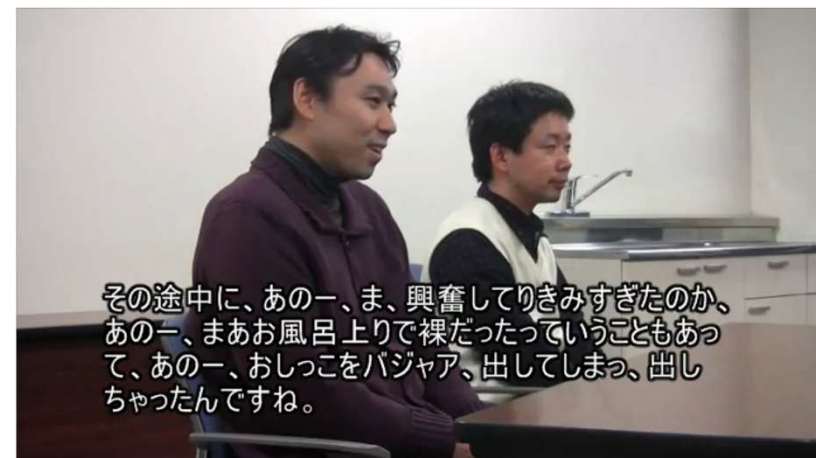
“..., and you know he, pee, splash

出してしまっ

dashi-te-shima-tt [*suspended disfluently*]

excrete-CVB-negative image-*tt*

“he leaked , he leaked pee forcefully, how’s this?”



出しちゃったんですね。

dashi-cha-tta-n-desu-ne

excrete-negative image-PST-NMLZ-COP.POL-**SFP**

言いたいこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。

アンケート調査の概要

日本語母語話者149-1人（2022年4月実施 声7設7）

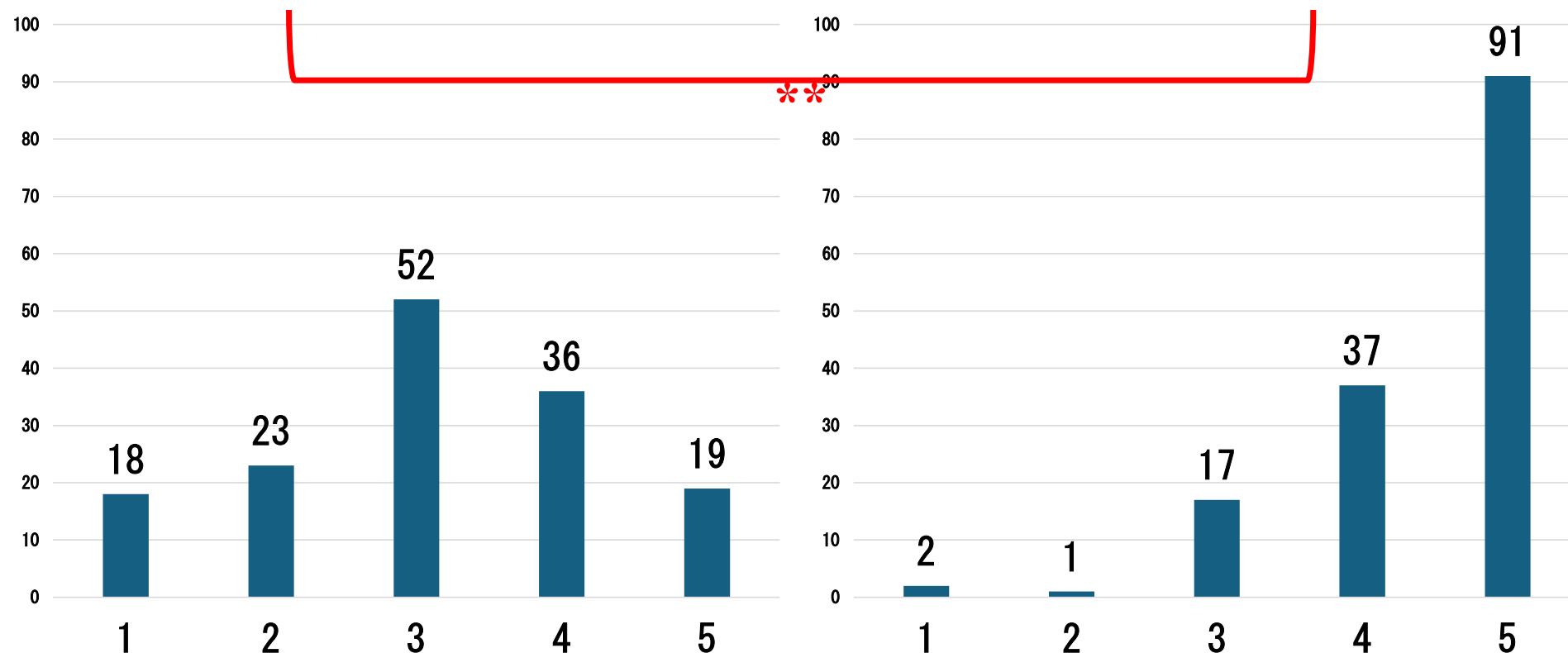
年代	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	無回答	計
男性	1	18	8	8	10	20	17	0	82
女性	1	15-1	7	14	7	9	9	4	66-1
無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	2	33-1	15	22	17	30	26	4	149-1

課題：自然さを判定（1点：とても不自然～5点：とても自然）

Webページ

有償

[切符を落として気付かない乗客に別の乗客が]
「切符を落とされました」 「切符を落とされましたよ」



[蓮沼昭子 1996 「終助詞「よ」の談話機能」上田功・砂川有里子・高見健一・野田尚史・蓮沼昭子（編）『言語探求の領域—小泉保博士古稀危険論文集』pp. 383-395. 東京：大学書林]

[井上優 1997 「「もしもし、切符を落とされましたよ」—終助詞「よ」を使うことの意味」『言語』第26巻第2号, pp. 62-67. 東京：大修館書店]

アンケート調査の概要

日本語母語話者100-2人 (2021年5-6月実施 声4設7)

性別 年齢	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	無回答	計
男性	3	21	7	11-1	1	7-1	1	0	51-2
女性	1	15	17	6	2	7	1	0	49
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	4	36	24	17-1	3	14-1	2	0	100-2

課題：自然さ判断（1点：とても不自然～5点：とても自然）

方式：web

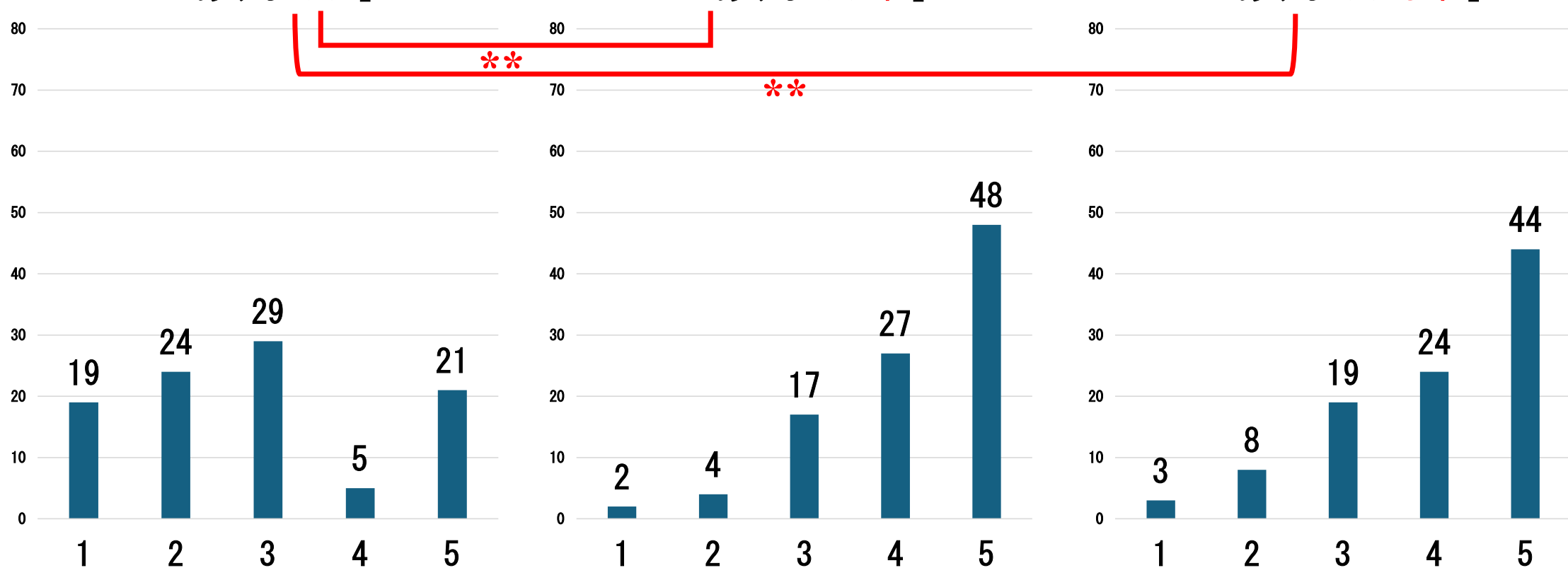
報酬：あり

〔部下が上司に唐突に〕「今朝、九州で地震が～」

「～ありました」

「～ありましたね」

「～ありましたよね」



終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

儀礼的な発話

挨拶（同形での言い交わし、発話重複が選好される発話）

- 「おはようございます」
- 「よろしくお願いします」
- 「失礼します」

発話重複の選好だけでは半ば挨拶、半ば情報提供

- 先日は大変失礼いたしました。（謝罪）
- 先日はお世話になりましたありがとうございました。（謝辞）
- （〇〇さんは別格だって、もうみんなで話してところなんです。）（賛辞）
- （私なんかは運動神経がありませんから全然ダメなんです。）（卑下）

挨拶でない

- 「～と申します」（自己紹介）

終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

体験発話

- 「しっ。クマがいる」 （先導的立場 「か」より「よ／ぞ」）
- 「ほら、見ろ、～」 （先導的立場 「か」より「よ／ぞ」）
- 「見張りが」「島です」 （先導的立場 「か」より「よ／ぞ」）
- 「こんなところにある／あった」
- 「雨だ」
- （一口食べて驚く）「甘い」
- 「あーあ割れちゃった」
- 「やれやれ、これで2回目だ」

- 「またお前は[そういうことを言う]」 （非難形式 「か」は不自然）

アンケート調査の概要

日本語母語話者149-5人（2022年4月実施 声7設12）

年代	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	無回答	計
男性	1	18	8-1	8	10	20-1	17	0	82-2
女性	1	15	7-2	14	7	9-1	9	4	66-3
無回答	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	2	33	15-3	22	17	30-2	26	4	149-5

課題：自然さ判断（1点：とても不自然～5点：とても自然）

方式：web

報酬：あり

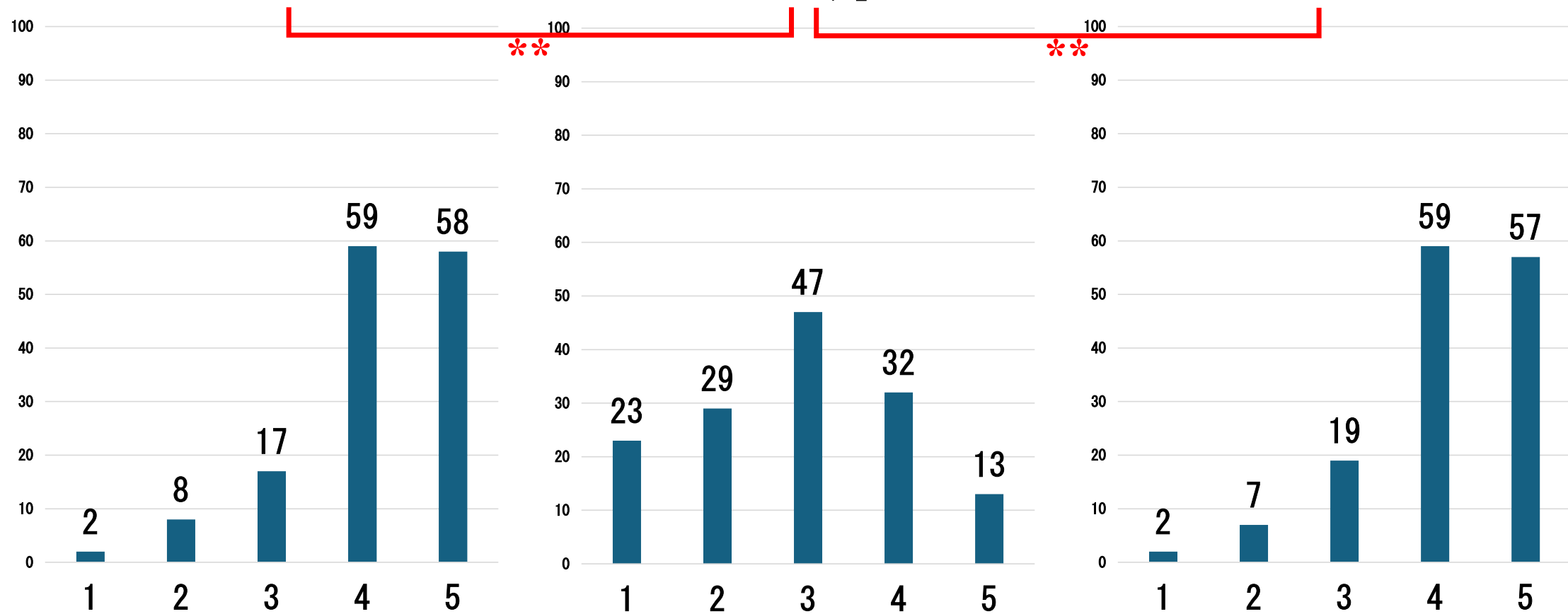
【これは情報提供ではなく、現場での体験発話。自然さに権力が関係】⁽¹⁴⁴⁾

〔10月初旬に唐突に「あと3か月で正月～」〕

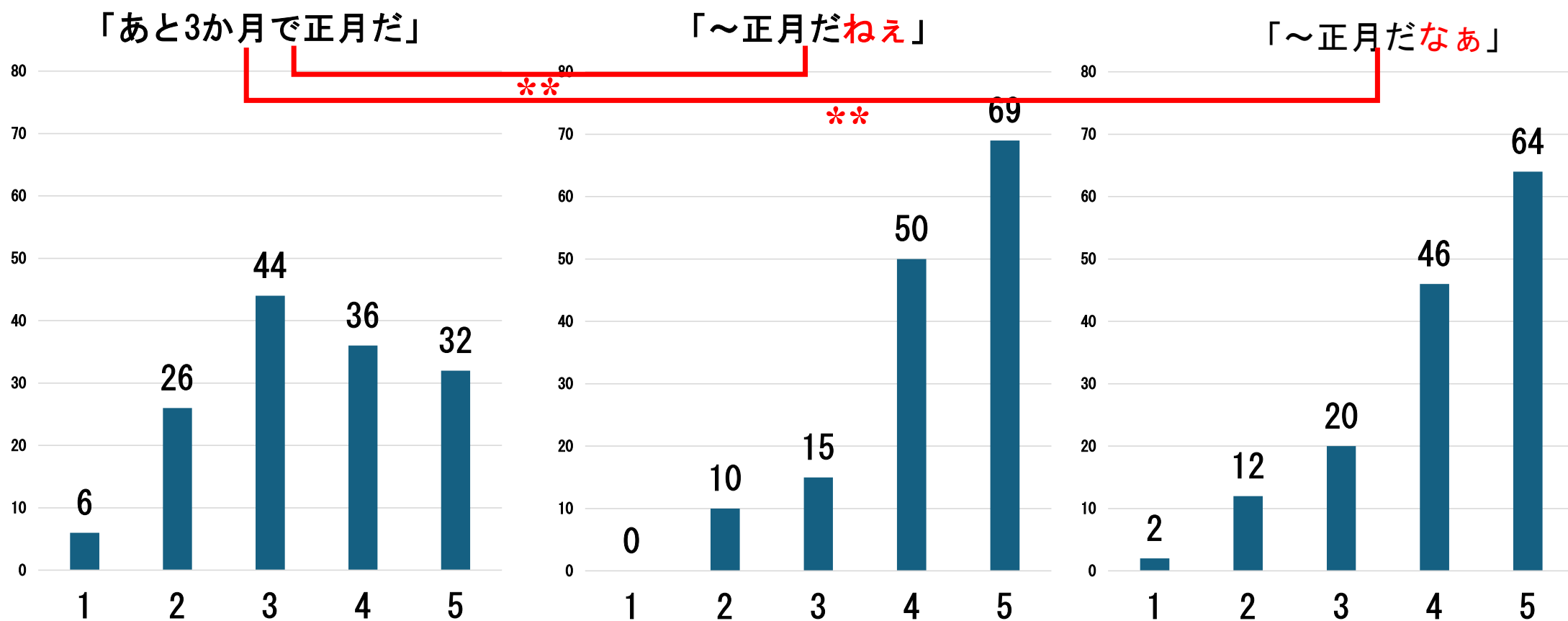
「～=だ」

「～=です」

「=です=ねえ」



【きもちも関係】



終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

評価発話

- 「よかった」
- 「～して／～でよかった」
- 「～したら／～でよかった（のに）」

終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

受け発話（第 2 発話の一種）

エコー的

A : 「この書類を持って 2 番の窓口に行ってください」

B : 「書類を持って 2 番窓口に行く。（わかりました）」

非エコー的

- 「そうなんだ」
- 「わかりました」
- 「了解です」

終助詞無しの終止形の文発話でやること

- 儀礼的な発話（挨拶・謝罪・謝辞・自己紹介）
- 多少とも独話的な発話（体験発話・評価発話・受け発話）
- 情報提供（業務発話・第2発話・緊急性の高い発話）

情報提供

- 業務発話

「目的地はこの先、300メートルです」（カーナビ）

「東北から近畿で気圧が低下する見込みです」（天気予報官）

- 第2発話

「あれは？」 「あれはメジロだ」

「どれぐらい降りました？」 「ものすごかったです」

- 緊急性の高い第1発話

「割れる！」

「そこ、段差あります」

[囁き声で] 「（社長、）チャック開いてます」

[子供が] 「先生、お腹が痛い」

アンケート調査の概要

日本語母語話者116-11名(2024年1月実施 声14-2 設問21)

年齢	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	無回答	計
男性	1	9	11	8-2	7-1	8-1	11-2	0	55-6
女性	1	8-1	9	15	8-1	8	12-3	0	61-5
無回答	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	2	17-1	20	23-2	15-2	16-1	23-5	0	116-11

課題：客に対するホテルマンの発話としての自然さを評価

(1点：とても不自然～5点：とても自然)

Web

有償

【下位者の名詞一語発話は緊急の発話でも不自然】

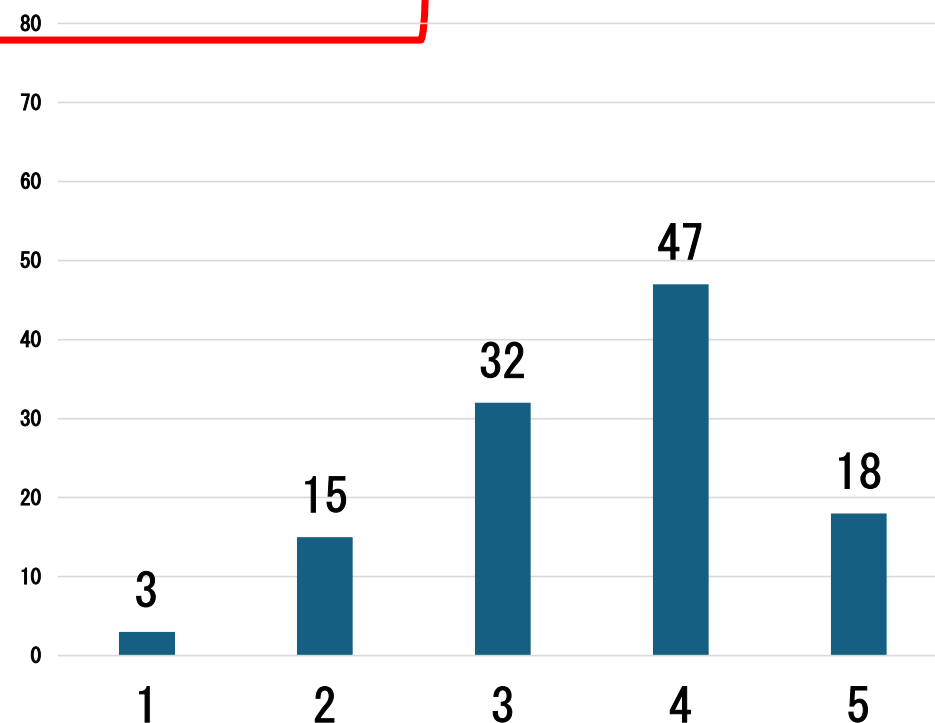
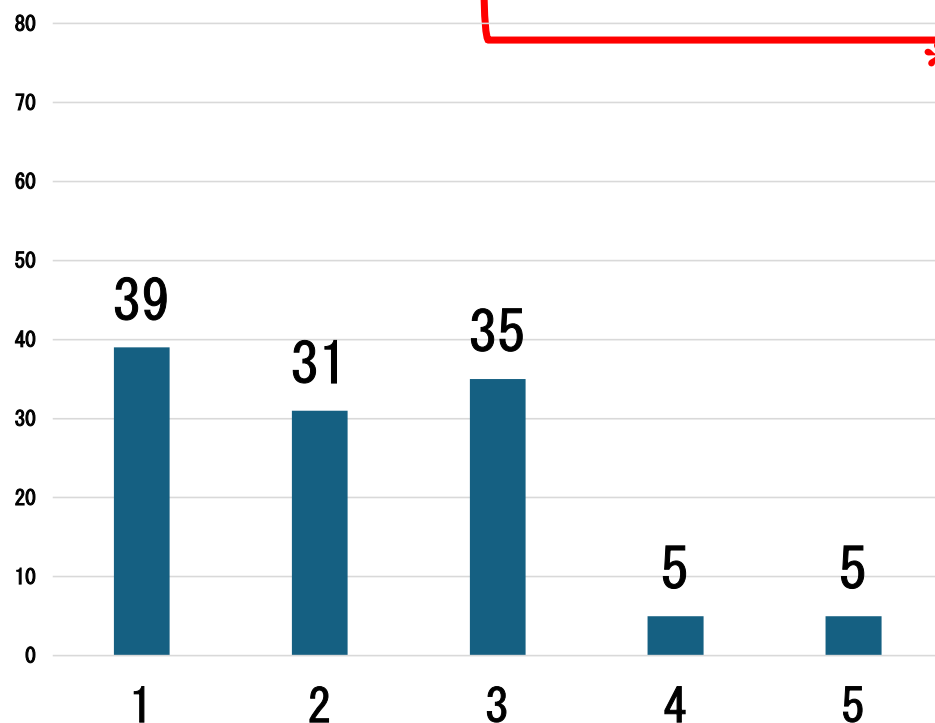
[目の見えない客が段差に気付かず歩いてくる。一流ホテルのホテルマンが]

[名詞一語発話]

「段差！」

[文発話]

「段差あり=ます！」



言いたかったこと

- 「長い文発話」に見えるもの（以下略）は、そう考えない方が便利である。
- 談話（コミュニケーションの言語的側面）は文発話からのみできているわけではない。文以外の要素もあり多元的である。
- 文・節・句・語は、終わり方の違いである。その発話が文・節・句・語のいずれなのかは、発話中には、しばしば話し手にもわからない。発話計画は非固定的で流動的になり得る。
- 書きことばに圧倒的に多い終助詞無しの情報提供の文発話は、話しことばでは限られている。